



ヨーロッパの街角から

原発事故 ～ドイツからの視点～

先月のコラムは原稿校正中に震災が来たため急ぎよ書き換えたものだった。それから3週間、慌しく日々が過ぎ原発事故の状況も大きく変化している。今回は在独邦人の視点からこれまでの事態を見直してみたい。

およそ8千人の在独邦人も震災と原発事故の影響で強いストレスにさらされている。被災された方々とは比較にならないが、私を含め家族や知人が被災した人は珍しくないし、祖国の放射能汚染という悪夢に悩まされている点は同じだ。

ドイツメディアの報道姿勢は極めてストレートである。日本と違い受け手のストレスやパニックに配慮がないから、予想される最悪の事態を直接的に報じている。事故発生2週間頃、ニュースチャンネルN24は融解した燃料棒が格納容器の底を突き破り、さらに水素爆発も起こす解説アニメを流していた。テレビをつけておけば「原子炉崩壊、秒読み段階」といったセンセーショナルな見出しが日に何十回と流れ、鬱になる在独邦人が少なくなかった。

原子炉内の詳しい状態は不明なため、結局のところ報道は推測の域を出ない。その際、日本側は希望的観測に基づく傾向が強くドイツは悲観的な予測に傾きやすい。水素爆発が続いた3月16日時点で、日本側が「福島第一原発 燃料棒損傷進んだか (NHK)」と報じれば、ドイツ側は「福島原発 暴走状態 (N24)」のように伝えていた。さらにドイツメディアはグリーンピースをはじめとする原発反対派のコメントを多く求めるから、日本とドイツの見解はずれる一方だ。

客観的な事実であっても同じことが言える。例えば4月7日、日本側が「このところ野外の屋外の放射線量 減少か横ばい (NHK)」ならば、ドイツメディアは「依然、放射線は高レベル (N24)」といった具合だ。見方を変えればこれだけ異なった表現になる。

また、低いレベルの放射線によって高まる病気のリスクには諸説あり、どの数値を使うかは恣意的な判断による。そういったところで常に危険を小さく見積ろうとする日本政府と大きく見積るドイツの間で、在独邦人の頭はいやがう

えにも混乱する。

今もチェルノブイリの影響を受けるドイツ人は被曝に対し日本人より警戒心が強く、悲観的に考えるきらいがある。また恐怖のシナリオを言い放つドイツメディアの報道姿勢はあまりに無責任だ。かといって日本の楽観主義（あえてこう書かせていただく）が望ましいかと問われれば、とてもそうは思えない。パニックを起こさない配慮は必要でも、それは国民が知るべき情報まで出さないという意味ではない。

例えば再度水素爆発したら、どれだけの被害が発生し、どういった避難が必要になるのか。具体的な想定を伝えることは政府とメディアの義務だと思うが、少なくとも私はその情報を知らない。市民は事故が拡大した最悪の場合をふまえて、政府がどのように最大限の努力を払っているのか知りたがっている。欲しいのは「安心です」のような掴みどころない甘言ではなく、厳しい現実を直視した上で示される希望のビジョンである。

原発事故のため、取るものもとりあえずドイツへ避難して来た知人は多い。在日ドイツ人、その家族、あるいは以前ドイツで勉強した人など事情は様々だ。空港に降り立ったドイツ人は安堵の涙を流し、日本人は残してきた家族と祖国を思い涙している。／日本時間4月11日執筆
(在独ジャーナリスト 松田 雅央)



3月26日にベルリンで行われた反原発デモの様子。参加者は主催者発表で12万人。
出処：Koordinationsbüro Anti-Atom-Demo